

第29章

アルマ 30 - 31 章

はじめに

アルマ書の 30 - 31 章では、イエス・キリストに敵対する人や考えが登場する。エズラ・タフト・ベンソン大管長 (1899 - 1994 年) は次のように語っている。

「モルモン書は二つの方法をもって人々をキリストのもとに導いています。その一つは、キリストとその福音について率直に告げる方法です。……

第 2 に、モルモン書は、キリストの敵を暴きます。モルモン書は偽りの教義を打ち破り、争論を鎮めるものです (2 ニーファイ 3:12 参照)。またそれは、謙遜にキリストに従う者たちが、今日の悪魔の企てや戦略、その教えに頑強に対抗できるよう力を与えるものです。モルモン書に出てくる背教者のタイプは、今日のそれによく似ています。わたしたちが誤りを見抜き、今日の誤った教育や政治、宗教、哲学などの概念といかに戦ったらよいかその方法を知ることができるように、神は実に無限の先見の明をもってモルモン書を備えられたのです。」(『聖徒の道』1975 年 8 月号, 366 - 367)

コリホルがどのようにしてニーファイ人の信仰を崩そうとしたか調べていくと、人の信仰を崩す同じ論法が今日の世の中にもあることがいっそうよく分かるようになる。コリホルの主張にアルマがどう対応したかを研究することによって、信仰を打ち砕こうとする人々から自分やほかの人をさらによく守る備えができるようになるであろう。

注解

アルマ 30 章 現代のコリホル

• 以前七十人を務めていたジェラルド・N・ランド長老は、現代にもコリホルのような人がたくさんいることを次のように説明している。

「今日、世の中はコリホルが教えたような哲学であふれています。本にも出てきますし、映画やテレビでも提唱されています。また、授業で教えることもあり、時には現代の諸教会で教えているのを耳にすることもあります。……

……コリホルとその教えについてくまなく記述されているのは、モルモンが靈感を受けていたことの厳然たる証拠です。コリホルの教えは古い教義ではありますが、現代の高速印刷機やパラボラアンテナと同じくらい現代にマッチする考え方でもあるのです。」(“Countering Korihor’s Philosophy,” *Ensign*, 1992 年 7 月号, 20)

アルマ 30:6 反キリスト

• 『聖句ガイド』には、「反キリスト」について次のような解説がある。「人や事物を問わず真実の福音の救いの計画を装

うもの、また公然か否かを問わずキリストに敵対するすべてのものを指す。……反キリストの最たる者はルシフェルであるが、彼には、霊の者と死すべき者の双方に数多くの助け手がいる。」(「反キリスト」の項, 212)

十二使徒定員会のブルース・R・マッコンキー長老 (1915 - 1985 年) はさらに次のように教えている。「反キリストは、キリストの敵対者である。そのような人は真の福音、真の教会、真の救いの計画に敵対する立場を執っている (1 ヨハネ 2:19; 4:4 - 6)。そして、キリストが定められたものとは異なる条件で救いを得させようとする。シーレム (モルモン書ヤコブ 7:1 - 23) やニーホル (アルマ 1:2 - 16)、コリホル (アルマ 30:6 - 60) は、誤った信念をニーファイ人の間に広めた反キリストである。」(*Mormon Doctrine*, 第 2 版 [1966 年], 39 - 40)

アルマ 30:7, 11 「人の信条を禁止する法律はなかった」

• 「人の信条を禁止する法律はなかった」のに、なぜコリホルは捕らえられたのかと疑問に思う人もいるであろう。モーサヤ王は、「不信者 [が] 神の教会に属している者を迫害」することはニーファイ人の法律に反すると宣言する布告を出していた (モーサヤ 27:2)。

コリホルには自己の信条を持つ権利があったが、教会を滅ぼそうとした時点で、モーサヤ王の布告を破っていた。興味深いのは、ゼラヘムラの住民の多くがコリホルとその教えを受け入れたにもかかわらず、人生の大半をコリホルのような考え方で送ってきたアンモン^{こんにち}の民は、「彼をその地から連れ出させた」ことである (アルマ 30:21。18 - 20 節も参照)。アンモン^{こんにち}の民は、コリホルの教えの危険性を理解していた。

アルマ 30:12 - 18

コリホルの教えは、今日わたしたちの信仰を攻撃するために使われる主張とどのような点が共通しているか。

アルマ 30:12 - 18 コリホルの策略

• ある福音の研究者は、コリホルの哲学が今日の哲学といかに類似しているかを次のように説明している。「コリホルは、すべての問題をきわめて合理的かつ科学的に説明しようとしており、説明できないものはすべて『精神がおかしくなっている結果』でしかないとしている (アルマ 30:13 - 16)。そして、『先祖の愚かな言い伝え』の呪縛^{じゆばく}を解くよう訴

え(アルマ 30:31)、人々を
 がんじがらめにして『実際には
 ないこと』を信じさせている
 古い言い伝えや古来の迷信を
 撤廃しようとした(アルマ 30:16)。
 コリホルは、古いタブーを打ち破
 って新しい社会倫理を確立する
 必要があると説いた(アルマ 30:17-
 18, 25)。また、すべての人
 が『自分自身のもの』を自由に
 使えるようになることを要求
 して(アルマ 30:28)、祭司
 たちの搾取から民を解放する
 ことを訴えた(アルマ 30:27)。
 『人が死ねばそれで終わりである』
 というきわめて現実的な自然主義
 を説き(アルマ 30:18)、その結論は
 『人は皆、この世の生涯を善く暮らす
 も悪く暮らすも、その人の対処の仕
 方次第である』というまったく実利
 的なものであった(アルマ 30:17)。
 これに続いて、『人は皆自分の素質
 に応じて栄え、自分の力に応じて勝
 利を得る』という明らかな自由主義
 哲学を語り、『人がすることはどん
 なことも決して罪にならない』とい
 う、自然界の勝ち負けの鉄則によつ
 てのみ善悪が決まるとした(アルマ
 30:17)。これは人の行動に自然
 淘汰を当てはめたものであり、古い
 倫理や精神的な束縛からの解放は
 多くの人の耳に快く響き、『平然と
 悪事を犯させ、多くの〔人に〕……
 みだらな行いをさせた。』(アルマ
 30:18) コリホルは解放者のような
 態度を執っていただけでなく、世論
 をあおり、あらゆる反対意見を封じ
 込めようとした。これは現代でも
 コリホルのような考え方をする人
 によく見られる特徴である。反対
 意見をすべて『愚か』であるとか
 (アルマ 30:13-14。アルマ 30:31
 も参照)、精神がおかしくなったり
 錯乱したりしていることの証拠だ
 などと言うのである(アルマ 30:16)。
 アルマにとって自由な社会とは、
 だれもが自由に考え、発言できる
 社会であるが(アルマ 30:7-12)、
 コリホルにとって唯一の自由な社会
 は、すべての人がコリホルの考え
 るとおりに考える社会であった(アル
 マ 30:24)。」(ヒュー・W・ニブリー、
Since Cumorah, 第 2 版 [1988 年],
 379-380)



アルマ 30:15-16 コリホルの偽りの教え

・「あなたがたはまだ見ていない物事を知ることはできない」というコリホルの教えは、考えや知識はすべて経験から得るものであり、経験によって証明することが可能で、視覚、嗅覚、触覚、聴覚、味覚といった感覚を通して経験することによってのみ得られるという哲学である。神からの啓示に伴う霊的な経験は、視覚や嗅覚、触覚、聴覚、味覚を通して与

えられることはめったにないために、コリホルの哲学を奉じる者たちは、霊的な経験を無意味なものとなす。

十二使徒定員会のボイド・K・パッカー会長は、霊的な事柄は通常は五感を伴わないという事実を示す経験について、次のように語った。

「わたしがまだ中央幹部に召される前に体験した出来事を紹介したいと思います。それはわたし自身に大きな影響を与えました。飛行機に乗っていたときのことです。わたしは無神論者を自認する男性と隣り合わせた席に座りました。その人が神を信じていないということを執拗に言い張るので、わたしは証しました。『あなたは間違っています。神は実在しているのです。わたしは神がおられることを知っています。』

彼は反論してきました。『そんなこと分かるはずがないでしょう。一体全体だれに分かるというんですか。分かるはずがありませんよ。』わたしがどうしても折れないと見て取ると、弁護士だというその無神論者は、証というテーマに関して決定的な意味を持つと思われる質問をしてきました。彼は人を見下すような態度でこう言いました。『まあいいでしょう。それでは、あなたは知っていると言うが、一体どういうふうに知っているのか説明してもらいましょうか。』

わたしは大学院の学位も取得していましたが、いざ説明しようとなると、何と表現してよいのか途方に暮れてしまいました。

冷笑家、懐疑論者の質問すべてに答えることができずにさげすまれ、当惑する宣教師がいます。そのようなあざけりを受け、うつむいて恥じ入る人もいます(鉄の棒、大きな建物、人々のあざけりを思い起こしてください。1 ニーフアイ 8:28 参照)。

わたしが『御霊』『証』などの言葉を使うと、その無神論者は『何を言っているのかさっぱり分かりません』と答えてきました。『祈り』『識別の賜物』『信仰』などの言葉も彼には何の価値もないものでした。彼がこう言いました。『いいですか。あなたはほんとうは分かっているんですよ。もし分かっているなら説明できるはずじゃないですか。』

わたしは彼に対する証がまずかったのではと思い、どうしたらよいのか当惑してしまいました。そのときです。何かがわたしの心の中に注がれました。ここで預言者ジョセフ・スミスの言葉を引用したいと思います。『啓示の霊が最初に何かを勧めたときにそれと気づくなら、人は益を得ることでしょう。例えば、純粋な英知が流れ込んできたと感じるとき、突然様々な考えがわいてくることがあります。……このように、神の御霊を経験し、理解することによって、啓示

の原則が身に付いていき、ついにはキリスト・イエスにあって完全な者となるでしょう。』(Teachings of the Prophet Joseph Smith, ジョセフ・フィールディング・スミス編, ソルトレーク・シティー: Deseret Book Co., 1977 年, 151)

そのような考えが頭にひらめき、わたしは彼に言いました。『それではわたしにも質問させてください。あなたは塩がどのような味かを知っていますか。』

『当たり前ですよ。』

『いちばん最後に塩を口にしたのはいつですか。』

『さっき機内食で味わったばかりです。』

『それなら、塩の味がどんなものかほんとうに知っているのですね。』

『塩の味だけじゃない、何でも知っていますよ。』

『あなたに塩と砂糖を 1 杯ずつ与えて、両方をなめてもらおうとします。塩と砂糖の味の違いを説明できますか。』

『随分子供じみたことを言いますね。当たり前でしょう。塩の味くらい分かりますよ。塩をなめたことがない人なんてどこにいるんですか。常識ですよ。』

『それでは、わたしが一度も塩をなめたことがないと仮定して、それがどんな味か説明してください。』

彼はちょっと考えた後で、口ごもりながらこう言いました。『甘くもない、すっぱくもない。』

『それではどういう味でないかを言っているだけで、どういう味なのかの説明にはなっていませんよ。』

何回か口で説明しようとしたのですが、できるはずがありませんでした。塩の味というようにごく当たり前のことなのに、彼は言葉だけでは説明できなかったのです。わたしはもう一度彼に証し、こう言いました。『わたしは神がおられることを知っています。あなたはこの証をあざけり、もし分かっているなら、どう分かっているのかちゃんと口で言えるはずだと言いました。霊的なたとえ方をすると、わたしは塩の味を知っています。わたしはこの知識がどのようにして与えられたかを言葉では説明できませんでしたが、それはあなたが塩の味を説明できないのと同じことです。しかし、もう一度申し上げておきますが、神は実在の御方です。生きておられるのです。自分が知らないからという理由だけで、わたしまで知らないなどと言わないでください。わたしは知っているのですから。』

別れ際に彼はつぶやくように言いました。『わたしはあなたが信じているような宗教に頼らなくてもやっていけます。そんなものは必要ありませんよ。』

それ以後、わたしは自分が知っている霊的な事柄を言葉だけで説明できない場合でも、まごついたり、恥じ入ったりしたことは一度もありません。』(「主のとし火」『聖徒の道』1983 年 10 月号, 35 - 37)

アルマ 30:17 「人がすることはどんなことも」罪にならないとコリホルは教えた

• 世の中には否定する人がいるにせよ、相対的な価値体系のようなものはないと福音は教えている。人生にこの自由な価値観を当てはめることを許容する文化もあれば、奨励する文化すらある。政治やビジネス、人間関係において少しばかり不正直な行いをするを奨励しているのである。しかし、モルモン書は、善悪というものがあり、それが物事を判断する鍵^{かぎ}となると教えている(モロナイ 7:16 - 17 参照)。

• 「人は皆自分の素質に応じて栄え、自分の力に応じて勝利を得る」とするコリホルの哲学は、人生に神を必要としない。「人がすることはどんなことも決して罪にならない」というコリホルの哲学は、身勝手に相対的な価値体系を人の心に作り出すのである。

• 十二使徒定員会のニール・A・マックスウェル長老(1926 - 2004 年)は、コリホルの教えは明らかに利己的なものであると述べている。

「ある利己的な人々は、神の律法などないから罪はないと、誤って信じています(2 ニーファイ 2:13 参照)。また、状況に応じた倫理観を歓迎します。絶対な罪はないのですから、自分の知識と力の範囲内であれば何でも行えると信じているのです(アルマ 30:17 参照)。

これも驚くに当たりませんが、利己心は、誤った理解と不正な行動による失敗をもたらします。例えば、権力を求めて墮落したカインは、アベルを殺した後、『わたしは自由だ』と言いました(モーセ 5:33。6:15 も参照)。

このように、利己心をもたらす最悪の結果の一つは、物事の価値判断が大きく狂うことです。ぶよは濾すが、らくだは飲み込んでいるのです(マタイ 23:24 参照。末日聖徒イエス・キリスト教会発行の欽定訳聖書マタイ 23:21 [英文] 脚注 24a のジョセフ・スミス訳も参照)。現代では、例えば、様々なぶよを濾している人が、墮胎というらくだを飲み込んでいます。したがって、利己心によって、1 杯のあつものがごちそうに見えたり、30 枚の銀貨が財宝に思えても不思議ではないのです。』(『リアホナ』1999 年 7 月号, 27 参照)

アルマ 30:20 - 23 宗教指導者の教え

• 大祭司ギドーナはコリホルと対決し、なぜ預言者に逆らい、キリストの実在を否定するのかと問いかけた。コリホルはそ

の質問には答えずに、信者とその指導者に言葉の攻撃を浴びせ始めた。教会の指導者に従うのは愚かなことだと、すべての人に思わせようとしたのである。大管長会のヘンリー・B・アイリング管長は、これとは逆のことを教えている。

「コリホルの論拠は、世の初めから人が用いてきた偽りの論理でした。神の僕^{しもべ}の勧告を受け入れれば、神から受けた自立の特権が奪われてしまうというのです。しかし、この論理は偽りです。現実を誤って解釈しているからです。神から来る勧告を拒んだとしても、外部からの影響力から解放されるわけではありません。別の影響力の方を選んでいるのです。それどころか、わたしたちに永遠^{みだま}の命を受け、御自身の持てるものをすべて与え、主の愛の御手に導くことを目的としておられる、完全な愛と全知全能の天の御父とその愛する御子の守りを拒むことになるのです。主の勧告を拒むというのは、別の力から影響を受けるのを選ぶことです。それは、わたしたちを悲惨な状態にする^{たまもの}ことを目的とする、憎しみの力です。わたしたちには神からの賜物である選択の自由が与えられています。しかしこの選択の自由は、すべての影響力から解放される権利ではありません。いかなる力であれ、わたしたちが選択したものに従う何ものにも侵されない権利なのです。

もう一つの誤った考えは、預言者の勧告を受け入れるか否かの選択を、良きアドバイスを受け入れて得をするか、それとも受け入れずに今の状態にとどまるかの選択と同列にとらえることです。しかし、預言者の勧告を受け入れないという選択をすると、わたしたちが立つ土台が変わり、わたしたちは今までよりもっと危険な状態にさらされます。預言者の勧告を受け入れなければ、後に与えられる靈感に満ちた勧告を受け入れる力が弱まるのです。ノアが箱舟を造ろうとし

ていたとき、それを助けようとの決断をする最良の時は、ノアが助けてくれるように求めた最初の時でした。その後は、求められては断ることを繰り返す度に御霊^{みたま}に対する感受性が失われていきました。そして、繰り返されるノアの警告が次第に愚かしく思えてきたところで雨が降り始めるのです。そのときはもう手遅れでした。」(『聖徒の道』1997年7月号, 29)

アルマ 30 : 25 反キリストがよく用いる部分的な真理

• 信仰を打ち砕こうとする人がよく使う手に、「ストローマン (わら人形)」論法と呼ばれるものがある。これは、「ストローマン (わら人形)」という、真理を曲げた架空の像を作り上げて攻撃し、真理を誤りだと信じ込ませるものである。簡単な例を挙げれば、宿題が終わるまで遊ばせてくれないから自分に何の楽しみも与えたくないのだと両親を責める子供である。間違った論法だが、人を欺くためによく使われる。

末日聖徒は、実は信じていないものを信じていると人から言われることがある。間違った信仰は間違いであると主張し、その誤りを明らかにしようとする人がいるのである。わたしたちが真に信じていることとは何の関係もないことを取り上げて、わたしたちが間違っているかのように見せようとするのだ。コリホルがギドーナに対して行ったのはこれである。「この論法は『ストローマン (わら人形)』と呼ばれる。つまり、アダムの背きのために子供は罪を負うという考えをギドーナが持っていない、にもかかわらず、ギドーナはそう信じているとコリホルは決め付けたのである。コリホルは真理に真っ向から挑んでも勝ち目がないことを知っていた。そこで、ギドーナが間違った教義を提唱していると主張することにしたのである。これは言葉による攻撃の格好の的となる『ストローマン (わら人形)』であった。」(ジョセフ・フィールドینگ・マッコンキー、ロバート・L・ミレット共著、*Sustaining and Defending the Faith* [1985年], 90)

アルマ 30 : 29 議論と争いを避ける

• 預言者ジョセフ・スミス (1805 - 1844 年) は、争いを避けるべきであると教えた。「長老たちは不必要に人々の感情を害したり逆なでしたりすることがないよう細心の注意^{けんそん}を払おうではないか。あなたがたの務めは謙遜と柔和の限りを尽くして福音を宣べ伝え、悔い改めてキリストのもとに来るよう罪人に警告することである。真理を知ることを望んでいない、性根の腐った者たちとの争いや無益な議論^のを避けなさい。『今は警告の時であり、多くの言葉を費やす時ではない』ことを忘れないように。ある場所で証^{あかし}が受け入れられなければ、ほかの場所に行きなさい。ののしったり、悪口を言ったりしてはいけない。自分の義務を果たすならば、す



© 2000 スタイアーズ・バンダー・ソーン

べての人が福音を受け入れたと同じ祝福をあなたは得るであろう。」(History of the Church, 第1巻, 468)

アルマ 30:37-44

真の教会に対するコリホルの攻撃を論破するために
アルマが用いた方法を少なくとも3つ挙げる。
真理を擁護するためにわたしたちができる同じような
備えとして、どのようなものがあるか。

アルマ 30:39 個人の証の力

・十二使徒定員会のジェフリー・R・ホランド長老は、反キリストへの一つの対応の仕方を説明している。

「コリホルは、将来来られることになっているキリストを信じる『愚かな言い伝え』をあざ笑った。

コリホルの理論は、現代の読者には非常に現代的に聞こえるが、これに対してアルマは、いつの時代にも通用する否定し難い究極の武器、つまり、個人の証の力を用いた。コリホルとその賛同者たちが基本的に幸福を否定していることに怒りを覚えて、アルマはこう問いかけている。『なぜキリストは現れるはずがないとこの民に教えて、彼らの喜びを妨げるのか。』[アルマ 30:22]『わたしは神のましますことを知っている。』(Christ and the New Covenant [1997年], 121)

アルマ 30:40 「あなたは何の証拠があって神は実在[し]ないと言うのか」

・ジェラルド・N・ランド長老は、神が実在しないことを証明するのは不可能であると説いている。

「コリホルは問いかけられて、神がいるとは信じないと強硬に言い張りました。そこでアルマは、こう尋ねます。『あなたは何の証拠があって神は実在せず、またキリストは来られないと言うのか。あなたの言葉のほかには何一つ証拠がないと、わたしはあなたに告げる。』(アルマ 30:40)

アルマの側には、靈感による洞察力がありました。コリホルの考えには一貫性がありません。もしも、実際に知ることができるのは経験して証拠を得たものだけであるとしたら、神がいないという証拠がないかぎり、神が実在しないという信条を教えることはできません。そして、コリホルには証拠がありませんでした。

コリホルが頼ろうとしているのは、五感でとらえられる証

拠のみです。このような方法では、神が実在しないことを証明するよりも、神が実在することを証明する方がはるかに容易です。神が実在することを証明するためには、神について見たり聞いたりするなどの経験をしさえすればいいのです。このような経験をすれば、それ以後、神が実在しないことを証明することはできません。しかし、神が実在しないことの証明となると、こうはいきません。なぜなら、神はこの地上におられるとは限らないからです。全宇宙を探さなければなりません。しかも、神は動き回ることがおできになりますから、宇宙をA点から始めてZ点までくまなく探すだけでは十分ではありません。わたしたちがA点を離れた後で神がA点に移動して、わたしたちの搜索が終わるまでそこにずっとおられるとしたらどうしますか。

言葉を換えれば、コリホルは、自分が作り上げた基準に基づいて神はいないと言うために、全宇宙の様子を同時にくまなく調べなければならなかったのです。ここに矛盾が生まれます。神がいないことを証明するために、コリホルは自分自身が神にならなければなりません。つまり、神がいないと宣言するということは、自分があれほどひどくあざけった宗教指導者の持つ『信仰』に基づいて行動することなのです。』(“Countering Korihor’s Philosophy,” Ensign, 1992年7月号, 21)

アルマ 30:41 「わたしはすべての事物をもって、これらのことが真実であると証する」

・ゴードン・B・ヒンクレイ大管長(1910-2008年)は、証を強める神の創造の力について次のように語っている。

「夜、星を仰いで歩く人、野山に春の息吹を感じる人は、創造に神の御手^{みで}があったことを疑えるでしょうか。地球の美しさに気づく人は詩篇作者の言葉に共感を覚えるでしょう。『もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。この日は言葉をかの日につたえ、この夜は知識をかの夜につげる。』(詩篇 19:1-2)

地上のあらゆる美は、主なる創造主の……御手の業を表しているのです。』(『聖徒の道』1978年10月号, 94)

アルマ 30:48 しるしを求める人

・預言者ジョセフ・スミスは次のように教えている。「しるしを求める人を見たら、不義な人であると思ってよい。」(History of the Church, 第3巻, 385)

後に預言者は次のように語っている。「わたしがフィラデルフィアで教えを説いていたときのことである。一人のクエーカー教徒がしるしを見せろと大声で叫んだ。わたしは静かにするように彼に言った。説教が終わると、彼はまた

しるしを求めた。わたしは聴衆に、その人は不義な人であること、邪悪で不義な時代はしるしを求めること、また主が啓示の中で、しるしを求める者は不義な人であると言われたことを告げた。すると、聴衆の一人が叫んだ。『そのとおりだ。わたしは彼が不義を働いている現場を目撃した』と。後にその人はバプテスマを受けるときにその罪を告白した。』(History of the Church, 第 5 巻, 268)

• さらに、ジョセフ・F・スミス大管長 (1838 - 1918 年) は、奇跡に頼る信仰の危うさについて次のように説明している。「教会で確固とした信仰を保つためには奇跡やしるし、啓示が必要だと主張する人は、神の目から見て好ましい状態ではなく、危ない道を歩んでいる教会員である。」(Gospel Doctrine, 第 5 版 [1939 年], 7)

アルマ 30:52 偽りとうそをつくこと

• うそをつくのは悪いことだということがよく理解できるように、ブリガム・ヤング大学の元学長であるロバート・J・マシューズは次のような説明をしている。「うその由々しきは、だまされる側が受ける傷や苦しみによってのみ判断されるべきものではありません。うそはそれを言う本人自身にも破壊的な力を及ぼします。自尊心を失わせ、真実と誤りを識別する力をも弱めてしまうのです。うそは何度もついているうちに、言い広めている当人もそれをほんとうのことだと信じ始めてしまう場合があります。モルモン書に登場する反キリストのコリホルがその例です (アルマ 30:52 - 53 参照)。」(「あなたは隣人について偽証してはならない」『聖徒の道』1998 年 11 月号, 20)

• 預言者ジョセフ・スミスは、コリホルのような人の悲劇について次のように語っている。「神の御霊を受けていると思っ
ていながら偽りの霊の影響下にあることほど、人の子らにとって大きな害悪はない。」(History of the Church, 第 4 巻, 573)

アルマ 30:53 悪魔の欺きと肉の思い

• 肉の思いを抱くとは、御霊にかかわる事柄よりも肉体の快楽や物質的な事柄を優先することである。肉の思いを抱いている人には、御霊にかかわる事柄を体験することは難しい。ニール・A・マックスウェル長老は、そのような人たちは「肉の思いに快い言葉によって養われ、『心が鈍ってい
る』』と指摘している (『リアホナ』1999 年 7 月号, 28)。

アルマ 31:3 - 29 ゴーラム人の偽りの教義

• ゴーラム人はコリホルを殺したが、同じような体系の信仰を奉じていたようである。アルマ 31 章から、ゴーラム人の信仰を描写している次の節に注目してみよう。

「彼らは……大きな過ちに陥っていた。」(9 節)

「同胞の先祖が愚かにも……同胞に伝え[た]」と思っ
ている言い伝えを信じていなかった (16 節)。

「[同胞]を束縛してキリストを信じさせ」る「同胞の愚かな
言い伝えに惑わされ」たくなかった (17 節)。

「自分たちのまったく知らない将来のことを信じ」ようとし
なかった (22 節)。



ジェフリー・R・ホランド長老 © HRI

• ジェフリー・R・ホランド長老は、ゴーラム人の偽りの教えにコリホルが与えた影響について次のように述べている。

「[コリホル]のような教えが、信仰のあまり強くない人に影響力を及ぼすのは避け難いことである。案の定、隣接地に住んでいたゴーラム人たちは、すでに『主の道を曲げようとして』いた。

ゴーラムとその追従者は、モルモン書に登場する背教者のグループの中で最も記憶に留めておくべきものの一例である。それは、彼らが自分たちのことをきわめて義にかなった民だと考えていたからである。……彼らは週に 1 度、ラミアンブトムと呼ばれる祈り台の上に立って『まったく同じ祈り』をささげ、自分たちはほかのどの民よりも優秀な『選ばれた聖なる』民であって、周りの者は皆地獄に投げ込まれるにもかかわらず自分たちは救われる民として神から『選ばれている』ことを神に感謝していた。彼らはすべてこのように自分たちが守られていることを確信しており、救い主が実在するなどという『愚かな言い伝え』(コリホルの教えの影響がここにも表れている)も信じていなかった。キリストが現れることはない『示された』からと言うのである。……

アルマはこのような形の利己的な罪惡に文字どおり心を痛め、このように不敬な祈りと、同じく神を敬わない教義に対抗するために、時を移さず自分自身の祈りによって神に

助けを求めた。」(Christ and the New Covenant, 121 - 122)

アルマ 31:5

アルマによると、御言葉を説き教えることはなぜ力があるのか。この事実は、日々の聖文研究の大切さを説明するのにどう役立つか。

アルマ 31:5 御言葉の力

• 神の言葉に効力すなわち力があることは、そこに御霊の証が伴うという事実によってある程度説明がつく。主の御霊によって伝えられるとき、主の言葉は主の声であると、主は言われた(教義と聖約 18:34 - 36 参照)。背教したゾーラム人はすでに御言葉を聞いてそれを拒否していたにもかかわらず(アルマ 31:8 - 9 参照)、アルマは彼らに御言葉を宣べ伝えることを考えた。

ボイド・K・パッカー会長は、わたしたちが王国の教義を学ばなければならない理由の一つを次のように説明している。

「真の教えを理解すれば、人の態度や行動は変わります。

福音の教義を研究することは、人の行動を研究することよりも、ずっと速やかに行動を改善する力があります。ふさわしくない行動についてばかり考えていると、実際にそのような行動をするようになります。だからこそ、わたしたちは福音の教えを勉強するようにと強く勧めるのです。」(『聖徒の道』1987年1月号, 18 - 19)

• スペンサー・W・キンボール大管長(1895 - 1985年)は、わたしたちがもっと神に近づくのに助けとなる聖文の力について次のように述べている。「自分が神と密接な関係ではなくなったと感じるとき、また、自分の祈りが神の耳に達せず、神の声が聞こえないように思われるとき、わたしは神からはるか遠く離れていることが分かります。そのようになると、聖文に没頭すると、その距離は縮まり、霊性が回復します。心と思いと体



力を尽くして愛さなければならない人々を以前にも増して愛するようになったことに気づきます。そして、彼らの勧告に容易に従えるようになるのです。」(“What I Hope You Will Teach My Grandchildren and All Others of the Youth of Zion” [教会教育システム宗教教育者に向けた説教, 1966年7月11日], 4)

• エズラ・タフト・ベンソン大管長は、聖文がわたしたちにとっていかに大きな恵みであり、人生の疑問に答えを与えてくれるものであるかを、次のように説明している。「わたしたちはよくステーキでの活動のレベルを高めようと、大変な努力をします。また聖餐会の出席率を上げるために一生懸命働きかけます。さらに宣教師の数や神殿結婚の数を増やそうと努力します。もちろんこうした努力は立派なことですし、王国の発展のために大切なことです。けれども、もし各個人や家族が定期的に続けて熱心に聖文を読むならば、これらの様々な領域の活動は自動的に成し遂げられます。もっと証が深まり、人々はさらに熱心に参加するようになるでしょう。家族が強められ、個人に啓示が注がれることでしょう。」(『み言葉の力』『聖徒の道』1986年7月号, 81)

アルマ 31:9 - 11 背教の原因となるものを避ける

• アンテオヌムの地で、宣教師であるアルマと同僚たちは、ニーファイ人から分かれた「ゾーラム人」として知られる人々の一団に出会った。モルモンはゾーラム人がかつて神の言葉の宣教を受けていたことを記録するだけでなく、彼らの背教の原因まで指摘している。つまり、ゾーラム人は戒めを守ろうとせず、日々祈って神に嘆願することもすでにやめており、主の道を曲げていた。そのため、主に祈りをささげても、その祈りは届かず、無意味なものになっていた。彼らは意義深い祈りや聖文学習といった基本をおろそかにしていたのである。

七十人のドナルド・L・ステアリー長老は、日々一貫して福音の基本を行うことの大切さを強調している。

「赦しや特別な助け、導きを求めて日々熱烈に祈ることは、生活に必要不可欠で、証を育ててくれます。慌ただしい祈りや判で押したような祈り、またうわべだけで祈ったり、祈りを怠ったりすると、日々の問題に賢明に対処できるよう導きを与える御霊との、非常に大切な、親しい交わりを失うことになりかねません。毎朝毎晩家族で祈るなら、個人の祈りとわたしたちの証にさらなる祝福と力が増し加えられます。

個人の聖文学習を誠実に行うと、信仰と希望が増し、日々の問題を解決する手だてが得られます。祈りに加えて、頻繁に聖文を読み、瞑想し、聖文の教えを当てはめましょう。それは、力強く、魂を揺さぶる証を獲得し、保持するための非

常に大切な習慣となるでしょう。」(『リアホナ』2004 年 11 月号, 39)

アルマ 31:6 – 38 背教したゾーラム人

• アルマ 30:59 を読むと、ゾーラム人が、ゾーラムという名の男に率いられてニーファイ人から分かれたことが分かる。以下は、背教したゾーラム人の信仰と慣行について分かっている事柄の概要である。

モーセの律法を守っていなかった (アルマ 31:9 参照)。

日々の祈りを行っていなかった (10 節参照)。

主の道を曲げていた (11 節参照)。

週に 1 度礼拝する目的で、会堂を建てていた (12 節参照)。

現代の世の中にも、同じような間違った慣行に陥っている人々がいる。注意していないと、わたしたちも同じ言葉を繰り返す祈りをしたり、礼拝するのは 3 時間プログラムの間だけで週日には神のことを考えなかったり、決まった場所では祈らなかったり、物欲に走ったり高慢になったりするといったようなわなにはまってしまう恐れがある。

アルマ 31:26 – 35

アルマがゾーラム人のためにささげた祈りを読む。
キリストの弟子は同胞^{はらから}に対してどのような思いを抱くべきであるということが分かるか。

アルマ 31:26 – 35 ザーラム人のためにささげたアルマの祈り

• アルマは、背教したゾーラム人が神にとって大切な存在であることを知っていた。それで彼らを主のもとに連れ戻すための力と知恵を祈り求めた。アルマは模範的な態度で祈っており、このような態度は会員と宣教師のだれもがはぐくむべきものである。すべての人には大いなる価値があり、神の力によって、彼らを神のもとに連れ戻すことができるのである。

七十人として奉仕していたとき、カーロス・E・エイシー長老 (1926 – 1999 年) は、人の価値は神にとってもわたしたちにとっても貴いものであると教えた。

「わたしたちの兄弟姉妹の価値は、弱く、つまらない者のように見えたとしても、貴いのです。教会は彼らを必要としています。わたしたちは彼らのことを知るべきであり、彼らがイエス・キリストの福音の完全な祝福と喜びを味わえるように助けるべきです。わたしたちはアルマのように『おお、主よ、わたしたちが同胞^{はらから}であるこれらの人々を再びあなたのみもとに連れ戻すことができるように、わたしたちに力と知恵をお与えください』と祈るべきです (アルマ 31:35 参照)。

自分の救いがほかの人々の救いと密接な関係にあることを忘れてはいけません。自分の信仰をあまり気にかけていないように見える人のことを、わたしたちはもっと気かけなければならぬのです。」(“Nurturing the Less Active,” *Ensign*, 1986 年 10 月号, 15)

アルマ 31:31 – 33 苦難の中の慰め

• ロレンゾ・スノー大管長 (1814 – 1901 年) は、^{かんなん}艱難を通して与えられる祝福について次のように語っている。



「悩み、動揺し、胸を痛め、迫害を受け、時にはこれ以上堪え忍ぶことができないと考えている人に向かって話したいと思います。あなたが苦しんできたすべてのこと、そのときは災いであると思ったすべてのことについて、あなたは 4 倍祝福を受けるでしょう。そして苦難はあなた

をより良い人、より強い人にし、そして、あなたは自分が祝福されてきたことに気づくでしょう。経験してきたことを振り返るときに、あなたは大きな進歩を遂げ、昇栄と栄光に向かってはしごを数段上ってきたことに気づくでしょう。……

個人として見ても集団として見ても、わたしたちは苦難を受けてきましたし、これからもまた苦難^{きよ}を受けることになるはずで。なぜなら、わたしたちの聖めのために、主がそう求めておられるからです。」(The Teachings of Lorenzo Snow, クライド・J・ウィリアムズ編 [1984 年], 117 – 118)

理解を深めるために

- ある人々にとってコリホルの教えが魅力的なのはなぜだろうか。今日の世の中にあるこのような教えの例として、どのようなものがあるだろうか。
- アルマがゾーラム人を改心させようとしたのは、神を愛し、ゾーラム人を愛していたためであったと思われる。わたしたちはどうしたらこのような愛をはぐくむことができるだろうか。
- アルマの祈りはゾーラム人の祈りとどのように違っているだろうか。わたしたちの祈りがゾーラム人の祈りのようになってしまうのはどのような場合だろうか（アルマ 31：15 - 18 参照）。自分の祈りをアルマの祈りのようにするにはどうしたらよいだろうか（アルマ 31：30 - 35 参照）。

割り当ての提案

- コリホルの偽りの教えとしてどのようなものがあるだろうか。そのような論法が最終的には破れるのはなぜかを友人に説明する（アルマ 30：13 - 18 参照）。
- コリホルが神の存在を証明するしるしを求めたとき、アルマは神が生きておられる証拠としてどのようなものを提示しただろうか（アルマ 30：44 参照）。これらの証拠は、あなたの信仰を強めるのにどのように役立ってきただろうか。宇宙の構成と秩序は神が存在することのどのような証明になっているかを説明する短い文を書く。